

胆膵がん治療の最前線

～患者本位の診療を実践するために～

昨年、大阪市の印刷業者の元従業員らが高率で発症していたことが明らかになった『胆管がん』。この胆管を含む胆道や膵臓に発生する悪性腫瘍は、発見が遅れるケースが多く、がんの中でも治療が難しいと言われている。そこで、胆道がん・膵臓がん診療の現状や早期発見の重要性について、藤田保健衛生大学医学部・胆膵外科の堀口明彦教授に伺った。

見つけにくい予後が悪いのが胆・膵がんの共通の問題

インスリンを血液中に出す内分泌作用と、消化液である膵液を出す外分泌作用を持ち、胃の裏側、消化管のなかでも背中側に位置する器官が『膵臓』。そして、肝臓で生成された胆汁を十二指腸へ運ぶ経路が『胆道』です。それらの部位に発生する悪性腫瘍が『膵臓がん』『胆道がん』と呼ばれ、さらに『胆道がん』は、『胆管がん』と『胆のうがん』に大別されます。これらのがんは予後の悪さが共通の問題で、厚生省の統計データ（07年）によると、膵臓がんの罹患患者数は年間約3万人、うち死亡者数は2万5000人。胆道がん（肝内胆管がんを含む）の罹患患者数は年間約2万1000人、そのうち死亡者数は約1万6000人となっています。

理由は見つけにくく、内視鏡で病変部を直接確認できる食道や胃、大腸のがんなどと比べ、身体深部の胆・膵がんはどうしても発見が遅れがちになり、初期の自覚症状もほとんどありません。それゆえに黄疸や背中の痛みといった症状が出てから見つかり、すでに進行していたというケースが非常に多いのです。

進む膵臓がんの集学的治療 切除手術が第一選択の胆道がん

膵臓がんは、発見時にはすでに最終ステージで、周囲の神経や血管へ浸潤、肝臓などに転移していることが多く、消化器がんの中で最も手ごわいと言えます。統計上では切除可能な人はおよそ30%、うち5年生存率は15%ほどです。ただ近年は、再発後に抗がん剤治療で延命できるケースも増え、他のがん治療同様、放射線療法・化学療法・手術を併用する集学的な治療が主流となっているため、局所進行膵がんでは放射線や抗がん剤を用

いて術前にがんを小さくしてから切除する方法も増えています。

一方、胆道がんの切除率は、大腸90%、胃が86%に比べると低いものの、膵臓がんに比べると60%とやや高く、第一の選択は手術となります。難易度は部位によって細かく異なりますが、胆のうがんは比較的発見しやすく、早期で転移がなく、がんが粘膜の表層に留まっていれば胆のうを切除するだけで完治も見込めます。困難なのは肝臓につながる肝門部のがん。胆管、肝動脈、門脈がひとつの鞘(さや)に収まっているため周囲組織に浸潤しやすく、手術の難易度も増します。

高解像度画像診断で対処を検討 低侵襲手術の選択肢も拡大

診断は、超音波検査、CT、MRIなどで、がんの部位、周囲組織への浸潤の程度を調べます。なかでも、0.5mm単位の画像を見られるMDCT(マルチディテクターCT)による診断が有用です。病変部位や進行度で治療がかなり異なりますので、より正確に術前診断することが重要となります。

手術が可能なケースでは、腹腔鏡手術などの選択肢も広がっており、良性膵腫瘍に対する腹腔鏡下膵体尾部切除術が昨年4月から保険適用になりました。低悪性度の腫瘍には、十二指腸や胆

のう、胆管を温

存する縮小手術も可能です。また、手術支援ロボットによる低侵襲かつ高精度な手術も、一部ですが開始されています。たとえば、膵臓内の直径1〜2mmの膵管と腸を縫合する手術は非常に細かいため、手ぶれを防ぎ、立体的拡大画像で視野を確保できる手術支援ロボットの性能が活かされるのです。

できるだけ早い発見のため 疑いがあれば超音波検査を

厄介ながんとはいえ、よりよい診療のためにはやはり早期発見がカギになります。膵臓や胆道のがんが比較的早期で見つかるのは、超音波検査による膵管や胆管の拡張で、これらはがん発見の大きな手掛かりになります。その症状が疑われる場合は、迅速に専門機関で精密検査を受けることが重要です。

また、一般の健診でも血液検査に含まれるγ-GTPやALP(アルカリフォスファターゼ)、総ビリルビンといった胆道系酵素の数値異常が、がん発見のきっかけになることもあります。発見が遅れがちになるだけに、できるだけ早めに専門の医療機関を受診することをこころがけ、定期的に超音波検査を受けていただくことをお勧めします。(談)



藤田保健衛生大学医学部 胆膵外科 教授 堀口明彦氏

(ほりくち・あきひこ) 1984年藤田保健衛生大学医学部卒業。国立名古屋病院(現・名古屋医療センター)外科医員などを経て、93年藤田保健衛生大学医学部胆膵外科講師、2004年に准教授、11年より現職。専門は胆道・膵臓外科。日本消化器外科学会 評議員、日本肝胆膵外科学会 評議員、高度技能指導医、日本胆道学会 評議員、日本膵臓学会 評議員など役職多数。

